華興会と光復会の成立過程

中村哲夫

【要約】辛亥革命運動史において、孫文・興中会派と共に、華興会派と光復会派の革命家達の果した役割は決して少なくない。本稿では組織史的視角から両会派の成立過程を統一的に分析し、両会派の組織体質の相違の解明を試みる。一九〇三年、緊迫の度を加えてきた日露間の極東軍事情勢の下で、侵略の国・ロシアといかに対決するのかとの危機感から端を発した拒俄義勇隊の運動は、軍国民教育会への改名、その組織改革・秘密結社化の中から、「洋人の朝廷」と化した清朝の打倒を目標に、華興会を中心とする革命蜂起体制を生みだす。それは、日露戦争に対する中国の革命家の先鋭な意志表示でもあった。そして、侵略の国・ロシアと対決する一方、革命の国・ロシアを発見し、ロシアのナロドニキの戦術思想の受容が行なわれる。それが、軍国民教育会の暗殺団である。しかし、華興会はナロドニキ的傾向を排する。遂に、暗殺団を母体にして光復会が発足する。

史林　五五巻二号　一九七二年三月

はじめに

華興会と光復会は、孫文派の興中会と共に清末の革命運動を構成する三大潮流である。一九〇五年、この三会派が連合して中国同盟会を結成し、ここに於て革命運動は単一指導部のもとに新たなる飛躍が期待されたのである。しかし、光復会は同盟会結成後も存続し、激しい分派闘争を展開する。同盟会は統一組織としての最低限の機能すら喪失するに至る。かくまでに融和を阻み、相互不信を生ぜしめたのは、同盟会結成以前において、これら三会派がかなり異なった組織体質を形成していたことに起因する。この点について通説では、華興会＝湖南派、光復会＝浙江派、興中会＝広東派という図

式で説明されてきた。郷党関係、地域差の要素は全く無視されるべきではないが、果してそれだけに止まるものであろうか。政治思想、政治理論上の対立が、そこに媒介されていないだろうか。かかる疑問に駆られて、孫文派の興中会の研究に比して、全く立ち後れている華興会と光復会の成立過程に焦点をあて研究を進めてきたのである。華興会と光復会は、一九〇三年四月に結成された拒俄義勇隊から軍国民教育会への改名、その組織改革・秘密結社化の一連の過程の延長線上に形成される。拒俄義勇隊から軍国民教育会への発展過程については、一応の結論を得て「拒俄義勇隊・軍国民教育会①」と題して別途に発表したので、本稿と併読していただければ誠に幸甚である。本稿は組織史の事実関係に限定して言えば、その続編として軍国民教育会から華興会と光復会の成立過程を論じるものである。

そこで研究状況に眼を転ずると、華興会に関しては纏まった研究がなく、一方、光復会の成立に関しては小野川秀美氏の専論②を唯一とする。氏の一連の研究に教示を受けること多大であったが、光復会の成立に関しては、遺憾ながらその結論に同意できない。史実考証の論文でありながら、関連史料を羅列してその最大公約数を導く方法では、その結論は常に無難な線に落着く傾向を避け難い。特に秘密結社と化した軍国民教育会の活動を復元するには、極めて多くの困難をともなう。地下活動の担当部署別に断片的な記憶しか留めていない関係者の回憶を、唯一の史料とするからである。従って、回憶者自身の位置を測定して、記憶の断片を立体構成し復元する方法しかない。最大公約数を割りだす算術的史料操作よりも、時間と空間の中に断片史料を位置づける幾何的史料操作から出発しない限り、地下に潜行した中国革命の先駆者たちの苦闘の跡を再現できない。氏の「何れにしても、龔宝銓の暗殺団を母胎にして、蔡元培を会長に推し、光復会が成立したことは、疑のない事実であろう。」との最大公約数的論断は、結果において馮自由『革命逸史』の断片記事を無批判に肯定したにすぎない③。

暗殺団の問題に言及したのは、何も例示のためではない。暗殺団の出現は、ロシアのナロドニキの中国への最初の紹介と、その戦術思想の実践的受容を如実に物語るものである。換言すれば、中国の先進的知識人にとって、それは革命の

国・ロシアの発見、その最初の事例を示すものである。一方、義和団以来、中国人民に印象づけられていたロシア像は、侵略の国・ロシアである。しかも、本稿に登場する大部分の活動家たちは、侵略の国・ロシアと闘うため拒俄義勇隊を組織して、それを軍国民教育会に発展させ、その活動の中から華興会と光復会を設立したのである。迫りくる日露決戦必至の情勢のなかで、侵略の国・ロシアと闘い、革命の国・ロシアに学び、帝国主義列強の共同管理下にある清朝打倒を実践行動で達成しようとした。十九世紀ロシアの革命運動の経験を手引書にして、革命の仕方を模索し始める。ここに、清末革命運動が帯びた新しい様相がある。侵略の国・ロシアと革命の国・ロシア、そのロシア像のネガとポジが、彼等の行動に投影されてくる。従って、彼らの行動の軌跡の復元にあたって、二重のロシア像との関係に言及せざるを得ない。すなわち、日露戦争に対する彼等なりの臨戦体制として登場する華興会を中心とする革命運動、ロシアのナロドニキの戦術思想の中国への受容と光復会の成立との関係である。これらの問題を活動の経過に従って、後期軍国民教育会から華興会、光復会が形成される過程を復元しつつ論じてゆきたい。

本稿の作成にあたって、小野川氏、譚彼岸氏をはじめとする先学諸賢の研究成果[4]を参照し、また島田虔次氏、狭間直樹氏には有益な御指導を賜った。ここに記して各氏に深謝する次第である。なお本稿は、京大・人文研・辛亥革命班で行った報告（一九七一・十・一）である。

① 拙稿「拒俄義勇隊・軍国民教育会」（『東洋学報』第五十四巻一号）。
② 小野川秀美「光復会の成立」（『東方学報、京都』第四十一冊）。
③ 龔宝銓の暗殺団とは、何か？　龔宝銓が軍国民教育会会員であったことは、馮自由の指摘する通りである（『革命逸史』第二集、八七頁）。ところが、小野川氏は軍国民教育会の暗殺団に楊毓麟が属しているとの馮自由の指摘（『革命逸史』第二集、一二六頁）を熟知の筈である。とすれば、湖南出身の楊と浙江出身の龔とが、等しく軍国民教育会に属しながらも、暗殺団だけは別個に創ったと考えるか、あるいは同一の暗殺団かの判断を下さねばならない。もし別個のものとすれば、都合よく華興会＝湖南派、光復会＝浙江派の図式に落ち着く様である。ところが、後世に史料整理にあたって郷党関係に即して分解したと考えることも出来る。もし、湖南の楊と浙江の龔が単一の暗殺団を組織し、それが光復会の母胎であったとすると、郷党関係で規定する観点は、論理的に破綻してくる。そこで、光復会の源流を軍国民教育会以外に求める「史料」を、史料批判抜きに提出する。それが、光復会の源流＝浙学会説である。そして、龔の暗殺団が浙学会系かも知れぬ

との印象を与えて、軍国民教育会との結びつきを弱め、遂に最大公約数として、一切の修飾語を取り去って、光復会の母胎＝龔宝銓の暗殺団なる無難な線に落着かせてしまう。従って、光復会の源流＝浙学会説なる異説が成立しないことを第一節で、楊の暗殺団と龔の暗殺団は単一の軍国民教育会暗殺団であることを第三節で論証する。これは、考証のための考証ではなく、郷党関係論で切りえない何物かが、この時代の革命家たちの間で生起していたかを提示するためである。

④ 小野川秀美「劉師培と無政府主義」（『東方学報、京都』第三十六冊）、謝彼岸「俄国民粋主義対同盟会的影響」（『歴史研究』一九五九年第一期）、武藤明子「陳天華と楊篤麟」（『寧楽史苑』第一四号）、藤田敬一『『龍華会章程』解説」（島田虔次、小野信爾編『辛亥革命の思想』、筑摩書房）、永井算巳「陳天華の生涯」（『史学雑誌』第六十五編十一号）、同「清末の立憲改革と革命派」（『歴史学研究』二〇二号）、里井彦七郎「陳天華の政治思想」（『東洋史研究』第十七巻三号）、板垣望「排満思想の意味——楊篤生（篤麟）の場合」（『一橋論叢』第五十四巻四号）、北山康夫「武昌起義について」（『大阪学芸大学紀要』A人文科学六号）、増田渉「蔡元培について」（同『中国文学史研究』所収、岩波書店、一九六七年）、R・A・スカラピーノ、G・T・ユー著、丸山松幸訳『中国のアナーキズム運動』（紀国屋書店、一九七〇年）。欧文では、次の文献を参照した。

Hsieh Chih-tu (次君度); *Huang Hsing* (黄興) *and the Chinese Revolution*, Stanford University Press, Stanford, 1961.

Robert A. Scalapino; "Prelude to Marxism: The Chinese Student Movement in Japan. 1900-1910", *APPROACHES TO MODERN CHINESE HISTORY* (edited by A. Feuerwerker, R. Murphey, M. C. Wright), University of California Press, Berkeley, 1967.

Michael Gasster; *Chinese Intellectuals and the Revolution of 1911: The birth of modern Chinese radicalism*, University of Washington Press, Seattle, 1969.

一　帰郷運動と暗殺団

華興会が拒俄義勇隊・軍国民教育会の活動の中から発展したものであることは、改めて議論するまでもなく辛亥革命運動史の基礎事実として広く知られている。厳密に言えば、一九〇三年四月二十九日に発足した拒俄義勇隊（正式名称、学生軍）が、五月十一日に軍国民教育会と改称され、いわゆる義勇隊と通称される前期軍国民教育会の段階をへて、七月五日、秦毓麟らの改革意見書提出を機に革命実行機関・秘密結社としての後期軍国民教育会へと改組され、その活動が華興会へと発展して行ったのである。①

光復会については、華興会と同じく軍国民教育会にその源流を認めるのが通説である。厳密に言えば、後期軍国民教育

会の活動から光復会が成立して来たのである。ところが最近、小野川秀美氏[2]は「浙学会に重きをおく主張もあることを、今は記すに止める。」と、沈瓞民の「記光復会二三事[3]」を引いて光復会の源流＝浙学会説なる異説を紹介された。しかし、沈氏の回憶録に若干の史料批判を加えたならば、光復会の源流＝浙学会説なる異説は全く成立しない。そればかりか、光復会は私の言う後期軍国民教育会から発展したものであるとする説を、かえって補強するものであることが判明する。そこで沈氏の所説を要約すると、一九〇三年秋に浙学会の名儀で招集され「王嘉禕」なる者の下宿で開催された二回の秘密会合で革命運動の具体的工作の方針を決定し、それが光復会に発展した、とのことである。浙学会の発足の時点について、沈氏は明記していないが、おそらく後期軍国民教育会の成立と軌を一にすると考えられるが、推定にとどまる[4]。より明確な手がかりとしては、秘密会合の場となった「王嘉禕」なる人物の下宿に留学生の同郷会雑誌『浙江潮』の実質上の編集部が設けられていたとの沈氏の記述である。その「王嘉禕」とは、沈氏によると字は偉人、早稲田大学に在学し『浙江潮』の編集者であったとのことである。しかし、沈氏の言う「王嘉禕」とは誤記であって、姓は王、字を偉人なる人物とは、王嘉榘であり王家駒と号する青年会会員、義勇隊隊員、後期軍国民教育会への改組を画する改革意見書の連署人である[5]。すなわち、王嘉榘は軍国民教育会の最有力会員の一人である。さらに王嘉榘の下宿での秘密会合の参加者で沈氏が名前を明らかにしているのは、王嘉榘、蔣尊簋、許寿裳・沈瓞民、陶成章、魏蘭、龔宝銓であり、傍線を附した者が史料的にみて軍国民教育会会員と見做される[6]。従って、沈氏によれば光復会の原発起人が「王嘉禕」であり、軍国民教育会という名称が日本の官憲に〝誓約〟していた関係で使用できなかった事情を併せ考慮すれば、光復会の源流と称される浙学会の活動とは、実は後期軍国民教育会の浙江出身グループを中心とした活動に他ならないのである。

そこで問題の所在は、組織史的事実関係からみて如何にして後期軍国民教育会が華興会と光復会に発展して行ったかという所にある。この点に関して光復会の設立者の一人である陶成章は、我々に重要な示唆を残している。陶成章によると、華興会は黄興ら湖南出身の軍国民教育会会員の帰郷運動から発展して成立し、光復会は軍国民教育会の暗殺団が改名して

成立したとのことである。[7] それでは、軍国民教育会という共通の母体を持ちながら、何故にそれぞれ別個の組織が形成されねばならなかったのであろうか？　また帰郷運動とは一体何か？　暗殺団の実態は、いかなるものであったのか？　それらの一連の疑問を解くために、まず帰郷運動と暗殺団について今少し具体的事実を整理しながら、陶成章の説の当否を綿密に検討してゆくことにしたい。

帰郷運動とは、日本において結成された軍国民教育会が分省起義路線に基いて中国内地各省にむかって有力会員を帰国させて、その任務にあたらせたことを総称するようである。その任務にあたった者を、馮自由は実行員とも運動員とも称しているが、[8] いずれが正しいのであろうか。運動員なる名称は、前期軍国民教育会が五月十一日に採択した規約〔「公約」〕にみえる。[9] 従って、前期では運動員と称せられ、後期になって実行員に改められたのではないかと考えられる。しかし、規約では運動員の選出を自薦他薦ともに可とし、その任務がいかなるものであるかを明らかにしていない。「運動規則は別に定める」と規約に記しているが、残念ながら「運動規則」は各種留学生雑誌や『蘇報』にも掲載されていない。従って、前期の段階で運動員が秘密裏に実行員の活動に相当する分省起義工作に従事していたのではないかとの推測が介在する余地がある。この点につき、運動員の職掌を通して今一歩具体的に考察する。軍国民教育会の規約は、「学生軍規則」を継承したものであるから、学生軍のそれを見ると、本部職員の項に運動科が設けられ科長一名の下に無定数の運動員が属していることがわかる。[10] しかし、学生軍の軍隊の部は各人の姓名と任務分掌の記録が残っているが、本部職員の方は鈕永建が仮部長となったほか、二十九名の姓名が判明するのみで各人の任務分掌まで判別しえない。[11] ところが、本部職員のなかで運動員となっていることがはっきりと確認しうるのは陳天華である。しかも彼は、後に華興会に参加している。楊源濬の「陳天華殉国記」によると、陳天華は推薦されて運動員となり湖南に働きかける任務にあたり、「敬告湖南人」なる一文を草し湖南の教育界に郵送し併せて帰国の準備を整えていたが義勇隊が突然解散されたとの事である。[12] 従って通称義勇隊の運動員の職掌は、陳天華の活動からみると各省単位で中国内地にむけて宣伝・拡大する任を帯び帰国して活動す

るものであることが判明した。そこで、このような職掌を帯びた運動員が、いかなる活動に取組んだのかをより具体的に見てゆきたい。義勇隊発足時から留学生の活動を監視し二度にわたって弾圧した日本政府側が収集した情報によると、「湖南人龍毓峻一派」が、留学生の満州問題に対する見解を訴えるため、五月十二日頃出発し約二ヶ月の予定で帰国しようとしている、との事である。[13]「湖南人龍毓峻」とは全く不詳であるが、十二日頃出発の予定と言う翌十三日附の東京の留学生より上海中国教育会に宛てた書簡によると、楊毓麟、周家純の二名が南洋大臣・魏光燾に会見しようとする動きがあり、また陳天華、許翔の二名が湖南に帰郷して運動しようとしている、との事である。[14]「湖南人龍毓峻一派」とは、この四名のことを言っているのであろう。楊毓麟も陳天華と同様に学生軍本部職員に登録されているから、運動員と見做される。[15]陳天華が熱心に帰郷運動に取組んでいたことは、ここでも改めて裏づけられたのであるが、彼が実際に帰国したのは、一九〇三年の終り頃である。[16]彼は帰国しなかった代りに、「敬告湖南人」に続いて「覆湖南同学諸君書」[17]を草して東京の状況を報告している。その書簡の大意は、本国では留学生が尽く革命党化したと大騒動しているが、東京では極めて平静で日本体育会に行って有事の秋に備えるために体操の練習をしている、というものである。この様な運動員の活動は、湖南グループにのみ顕著に見られるものではない。実際に帰国して安徽愛国会の結成大会に臨んだ潘施華もその一人である。[18]また陳天華と同様に書簡を以て同郷人に働きかける活動は、浙江省の出身者にも見られる。[19]しかし、特に湖南出身者の帰郷活動が注目されるのは、その活動が華興会の結成という具体的成果に結実したからである。そこで今一度、湖南グループの動きに焦点をあてよう。曹亜伯は、一九〇三年五～六月頃、湖南省新化県出身の留日陸軍学生楊源濬（字は伯笙）が新たに東京より帰って来た、と述べている。[20]楊源濬の帰国の件は、『蘇報』六月二十九日附記事にもみえる。[21]楊源濬は洋装していたので外国人に間違われて洋務局から丁重に扱かわれたが、東京より帰国した留学生と判明すると、身柄を拘束され、湖南巡撫・趙爾巽の取調の結果、ようやく釈放された、と言うのである。五月下旬から六月上旬にかけて、帰国した留学生が革命党人であれば逮捕のうえ即刻処刑せよとの密諭が下されていたのである。この一件は、趙爾巽から

湖広総督端方へ提出された報告書簡によって確かめることが出来る。なお本書簡は、張篁溪の『沈祖燕、趙爾巽書信中所述清末湘籍留東学生的革命活動』[20]なる一文に収められているが、その解題で光緒三十年（一八〇四年）の書簡としているのは、前述の曹亜伯と『蘇報』の記事とに照して明らかに誤まりである。その書簡によると、趙爾巽は楊源濬を訊問すると共に、所持する二十数通の書簡を数通開封して検閲したが、中国の領土分割の危機が急迫しているとするもの、留学を勧誘するもの、学堂の振興、婦人の不纏足を訴えるもので、所持する書籍は日本の学科の翻訳書ばかりで、忠君の言が無いけれどもまた革命の説もなしと判断して釈放したが、私の処置に誤りがあれば御示教を乞いたい、との趣旨を記している。趙の判断によれば、日本へ留学している学生達の主張と革命党の宗旨とは一致しないと言う。それは、排満復仇革命論を唱道した章炳麟ら中国教育会・『蘇報』に拠る革命家たちと、中国分割の危機を強調しても排満復仇論を言わなかった東京軍国民教育会との相違を指摘しているのである。この相違が意見対立・論争となり軍国民教育会の路線転換となって表出するのは、七月五日改革意見書に於てである。従って、軍国民教育会が排満論を前面に掲げなかった段階を前期とすれば、今までみてきた運動員の帰郷活動はあくまでも前期の特質を体現していることが判明するのである。従って、後期軍国民教育会になると、運動員の名称を用いるのは誤りで、実行員という名称が正しい。ところが、馮自由は帰国して分省起義を担当する者を実行員しとたと言っているが、[21]一方では暗殺団関係者にも実行員と称せられた者があると言う。すなわち、暗殺団関係者の楊毓麟、周来蘇、蘇鵬も実行員となったとのことである。[22]また黄興のように比較的早期に帰国した実行員と、日本に滞在して専ら革命宣伝文献の執筆を担当し遅れて帰国した陳天華のような実行員もある。このように見てみると、実行員によって実践された活動内容は、単に分省起義路線の推進というだけでなく、暗殺団、革命宣伝担当の方面も含まれていると見做される。馮自由によると、軍国民教育会が決定した革命実行の方法に、鼓吹、暗殺、起義の三種があったとのことである。[23]おそらく軍国民教育会は、革命宣伝を担当する「鼓吹」部、各省で蜂起するための組織工作を担当する「起義」部、テロ活動を担当する「暗殺」部の三部に実質的に編成されていたと考えられる。従って、実行員と

は暗殺団関係者を含めて軍国民教育会の本部が日本に設置されていた関係で、本部から中国各省へ帰国し革命運動に従事する者を総称したのであろう。そして、革命運動の手順として最初に「起義」部所属のものが帰国することになり、まずそれらのメンバーが実行員と称されたのであろう。会員の中で出身省にあって相当の政治的力量のある者を推薦して実行員とし、帰国させて革命実行の工作に従事せしめた、湖南出身の黄興、安徽の程家檉、浙江の龔宝銓ら数人は帰国実行員の最有力分子であった、との指摘はこの事を言っているのであろう。[25] なお、実行員の名称そのものの由来については、後期軍国民教育会の政治思想的背景の考察のなかで改めて言及することにしたい。

そこで陶成章の言う光復会の組織母体である軍国民教育会の暗殺団に眼を転じて、具体的考察を進めて行きたい。暗殺団の場合は、前期軍国民教育会の活動から継承されたものではなく、後期において出現したものである。暗殺団が最初に出現した事例は、その当事者の一人である蘇鵬の『柳溪憶語』にみえる。[26] 蘇鵬によると、軍国民教育会が暗殺を実行する方針を採用し、武器として主に爆弾を必要としたので、彼と楊毓麟、何海樵、広東出身の胡、江西出身の湯は、東京を離れて横浜に行き、密に一軒の家を借りて爆弾製造所としたとのことである。ところが、蘇鵬はこの爆弾製造所の件を日露交戦中のこととしている。もしそうだとすれば、厳密に言えば一九〇四年以降のことになるがそれは誤りである。しかし、蘇鵬は一方で我々に有力なる手懸を残している。横浜の爆弾製造所に、同地でペストが流行していたので警察官の立入り検査があり、不意をつかれた彼らは薬品の処理を誤り暴発させてしまい、そのために彼と楊は眼に重傷を負った、と言うのである。本件は暗殺団にとって大事件であり、この件より暗殺団の存在時点を確定するのが最も妥当である。すなわち、一九〇三年の夏頃に設置され、十一月頃に暴発事件を起こしたものと推定される。[27] ところで、通説では光復会は浙江派と通称せられているにもかかわらず、陶成章の言う光復会の母体とされる暗殺団に浙江出身者が全く名前を連ねていない。それでは一体、この頃、浙江グループは何をしていたのであろうか？　その消息の一端は、「光復軍大元帥徐錫麟」に見える。[28] それによると、章炳麟が革命を唱言して投獄された（蘇報案）ので、浙江出身学生は牛込区の清風亭で会合を開き、

徐錫麟は資金を出してそれを賛助した。徐はその会合でたまたま陶成章、龔宝銓と意見が一致したので、散会後すでに張なる者とともに陶成章を訪問した。陶は彼を鈕永建に引き合せ、天下国家の情勢を語りあった。徐錫麟は、清朝政府を顚覆しようとする決意がこれによって益々強固となり、遂に図書と刀剣を購入して帰国した、と言うのである。蘇報案直後のことと言うから、七月中旬の浙江グループの消息を窺うことが出来よう。ここに於て注目されることは、拒俄義勇隊の発起人・鈕永建と陶成章、龔宝銓との間に密接なる連絡が保たれている事である。すなわち、後に光復会を結成する陶成章、龔宝銓らは、軍国民教育会の会員として行動している。従って、楊毓麟らの暗殺団に浙江派の者が参加していることを裏づける史料は直接的には見当らないが、全く無関係とは言えない。陶成章が光復会の成立事情に精通している筈であるから、浙江派の動きだけでなく、楊毓麟の主宰する軍国民教育会暗殺団の足跡をも併せて考察することが、光復会の成立過程を知る最良の方法である。そこで次節において、後期軍国民教育会と特徴づける暗殺団が登場してくる政治思想的背景を分析し、華興会、光復会の成立過程の解明に資することにしたい。

① 前出、拙稿「拒俄義勇隊、軍国民教育会」。

② 前出、小野川秀美「光復会の成立」。

③ 沈瓞民「記光復会二三事」（『辛亥革命回憶録』四。以下『回憶録』と略記する。）

④ 沈氏は浙学会に関して、発足の時点を明らかにせず、ただ発足の事情について次のように言う。要約すると、浙学会はもともと浙江省杭州に設けられ革命を宣伝したのであるが、直ちに清朝政府から逮捕せよとの命令が下されたので、一部の会員は恐れをなして声明を発して退会し、闘争を継続しようとする会員は陳漢第の発案で名称を浙学会に改め革命工作を進めた、との事である。浙学会の前身組織の名称は不詳であるが、革命宣伝をすると清朝政府から逮捕せよとの命令が下され一部会員が脱退したというのは、拒俄義勇隊・前期軍国民教育会の場合と全く同様であり、従って同会の発足は一応今のところ一九〇三年五月下旬から七月上旬のことと推定される。

⑤ 沈氏によると、「王嘉禕」とは字は偉人、早稲田大学に在学し『浙江潮』の編集者であったとのことである。そこで房兆楹『清末民初洋学学生題名録初輯』（中央研究院近代史研究所・史料叢刊）を参照すると、姓は王、字は偉人、浙江出身、早稲田在学生なる人物とは、王嘉榘を唯一摘出しうるのみである。また『革命逸史』（以下『逸史』と略す）初集も、青年会会員として姓は王、字は偉人なる人物を王家駒と記している。『逸史』第五集の拒俄義勇隊員の名簿に王嘉榘なる人物がみえる。また『逸史』初集の軍国民教育会意見書の連署人に、王家駒なる人物がみえる。王嘉榘、王家駒が同一人物であることは、「嘉」と「家」とは、chia「榘」と「駒」とは chü が通じることか

らわかる。日本政府から学生軍の解散を命ぜられた際、神田警察に出頭して王嘉榮と名のっている。また警視庁に出頭を命ぜられて軍国民教育会の解散を誓約させられた時は、王家駒と署名している。すなわち王嘉榮は、軍国民教育会の有力会員である。

⑥ 許寿裳は、学生軍の名簿（『逸史』第五集）に名を連ねている。なお、彼は周樹人（魯迅）の親友である。周樹人もこの時すでに浙学会会員である。その他の浙学会会員で同時に軍国民教育会会員であるとして傍線を附したのは、沈氏自身の記述に基く。

⑦ 陶成章『浙案紀略』上巻『紀事本末』（『辛亥革命』三、一六頁）、陶成章は光復会結成において実質的な活動面での第一人者である。しかし、暗殺団員ではない。

⑧ 馮自由『逸史』第二集「記上海志士与革命運動」、『逸史』初集「東京軍国民教育会」、「秦毓鎏事略」。

⑨ 『江蘇』第二期、一五二頁。

⑩ 『湖北学生界』第四期「留学紀録」。

⑪ 『逸史』第五集「癸卯留日学生軍姓名補述」。

⑫ 楊源濬述、張篁溪記「陳天華殉国記」（『湖南歴史資料』一九五九年、第一期）。

⑬ 日本外務省保管記録文書『在本邦清国留学生関係雑纂　雑ノ部I』所収。「乙秘第一八五号文書」五月四日付

清国留学生帰国セントス

清国留学生湖南人龍璋峻ノ輩ハ、満州問題ニ付キ頻リニ憤慨シ、協議ノ結果、留学生中ニテ委員十名ヲ撰定シ約二ケ月ノ見込ヲ以テ帰国シ、政府幷ニ総督ニ向ヒ留学生ノ同問題ニ対スル意見等ヲ披瀝シ、益々堅固ノ態度ニ出デラレ国家百年ノ計ヲシテ遺憾ナカラシメントノ事情ヲ陳叙セン目的ニテ、来ル十二日頃出発セントテ目下其準備中ナリト聞ク、然ルニ表面ハ満州及広州外三四ケ所ノ地ニ学校建設ノ為メナリト声言シ居ルト云フ。（句読点・濁点・略字引用者）

⑭ 『蘇報』五月二十日号、「東京要函照録・頃得東京陰十七日来函、言……（中略）……湖南学生中有楊毓麟、周家純亦有往南洋運動魏午帥之挙、回湘運動者、則有陳天華、許翔二人。……」。

⑮ 前出、『逸史』、「癸卯留日学生軍姓名補述」。

⑯ 拙稿「陳天華の革命論の展開」（『待兼山論叢』第二号）。

⑰ 『蘇報』六月十四日号。

⑱ 前出、拙稿「拒俄義勇隊・軍国民教育会」。

⑲ 『蘇報』五月二十八日号の「専件択要」欄にみえる「在日本東京之温州留学生函」は、その一例である。

⑳ 曹亜伯『武昌革命真史』の自叙に、「斯時（癸卯五月引用者注）新化留日陸軍学生楊源濬（字伯笙）、新自東京帰、帯有陳天華之猛回頭七千冊、皆被諸校董焚去。」と記している。なお『猛回頭』帯有の件は、後述する所の趙爾巽による取調の一件に照して見解を留保する。

㉑ 『蘇報』六月二十九日号の「険哉洋大人」という記事に「新化楊伯笙由東京帰国至湖南、猶服西装、為警保局巡査所疑、以報大府。大府以外国人来遊歴者、命洋務局総辦蔡道台、造其寓拝之。蔡至先遣親兵、入向楊請安、呼為洋大人来目。楊不解、示以名刺、幷告以自東京留学生帰国、非爾大人所欲拝之洋大人也。蔡覆大府、疑為革命党、立拘去、裸其身逼搜之、復検其行装、発其信書、皆無拠。藩台張紹華曰、但是留学生殺之可也、有拠無拠不必問。撫院趙爾巽、執不可、乃免。……」と報道されている。

㉒ 張篁溪「沈祖燕、趙爾巽書信中所述清末湘籍留東学生的革命活動」（『湖南歴史資料』一九五九年第一期）。

㉓ 「該会軍国民教育会成立後、推挙同志返国分省起義、名曰実行員」（『逸史』初集「秦毓鎏事略」）。

㉔ 『逸史』第三集「興中会時期之革命同志」。

㉕『逸史』初集「東京軍国民教育会」。
㉖『逸史』第三集「記上海志士与革命運動」。
㉗蘇鵬『柳溪憶語』(『中華民国開国五十年文献』第一編、第十冊、興中会下)。
㉘横浜市役所編『横浜市史稿』政治編三(一九三二年)に拠ると、「横浜市に於けるペスト病発生は、初発以来六回の流行を重ね、第一回は一九〇二年、第二回は〇三年、第三回は〇七年、第四回は〇九年、第五回は一三年、第六回は二六年であったと言う。すなわち、本件に関係するのは一九〇三年の第二回流行である。「翌(明治)三十六年、戸部四丁目及び西戸部町、三吉町、元浜町、南太田町、神奈川町等に同病患者が発生したに際しては、直に大消毒法を施行し、本いで遮断、隔離、焼払等前年の方法に依って撲滅を期したが、病毒潜伏区域は益々拡大せらるゝの傾向があったので、防疫機関の完備を必要となし、三十六年十一月六日、勅令を以て神奈川県に臨防時疫員が置かれた。」とのことである。従って暗殺団の横浜での爆弾製造所は、一九〇三年のペスト第二回流行以前に設置され、数ヵ月の苦心を重ねて爆薬製造にこぎつけ、十一月頃に暴発事件を起したと考えられる。
㉙『逸史』第五集「光復軍大元帥徐錫麟」。

二　ロシア・ナロドニキの戦術思想の受容

本節では軍国民教育会の後期を特徴づける暗殺団の中心人物、楊毓麟に焦点をあて、ロシアのナロドニキの戦術思想の中国への受容を論じ、後期軍国民教育会の革命戦略路線の政治思想的背景を把握することに努めたい。

一九〇三年は、小野川秀美氏の研究①によると、アナーキズム、ロシア虚無党に関する日本の研究書の中国語訳が登場した最初の年である。張継の翻訳書『無政府主義②』は、近代アナーキズムの最初の体系的紹介である。しかし残念ながら、この訳書が暗殺団の結成に思想的側面から直接のインパクトを与えた、と断定するには消極的にならざるをえない。暗殺団は八月頃には成立していたと考えられるが。同書が一九〇三年の何時発刊されたのかは不明であるからである。従って、暗殺団出現以前、もしくは同時に刊行されたと明確に断定しうる文献の中にこそ問題の内在的関連性を認めねばならぬ。そこで、小野川氏の指摘された関係文献から一九〇三年の前半に出版されたものに限定してリストにすると次の通りである。「専制虎」(『浙江潮』第一、三期)、「俄人要求立憲之鉄血主義」(同第四、五期)、「俄国虚無党女傑沙勃羅克伝」(同第七期)、「虚無党」(『蘇報』六月十九日)。譚彼岸氏は、楊毓麟『新湖南』を指摘している③。さらに卑見を附すと、楊毓麟『俄

羅斯虚無党』が挙げられる。④このようにみてみると、中国の知識人は一九〇三年上半期において、アナーキズムと言うよりもまずロシアのナロドニキに関する諸知識の摂取を完了していたことが了解できる。虚無党の虚無とはニヒリズムの日本の訳語であるが、包括的にはナロドニキを意味する。当時の日本では、虚無党なる語を以てナロドニキを代表させていたので、虚無党とはニヒリストの党という狭義の意味だけではなく、ナロドニキの代名詞として使われていた。⑤従って、中国知識人の近代アナーキズムへの接触についても、厳密に言えば、ロシアのナロドニキに関する情報摂取の一環として派生したものである。ナロドニキへの接触を端緒として、アナーキズムに関する体系的な理解に接近していったのである。

改めて解説するまでもなく、これらの情報源は煙山専太郎の著書に代表される日本の出版物にあった。期せずして中国の知識人に対する情報の提供者となっていた日本の出版者たちは、詳細に論証するまでもなく、総じて日露戦争を必至とする情勢のなかで、帝政ロシア国内の反政府・反権力闘争の高揚が、当面の日本の国益・国策に有利なものであるとの政治的判断を生みだす社会情勢に立脚していたといえよう。かかる角度からの情報は、極度にロシアに対する警戒心を高めつつあった中国の知識人にある種の共鳴現象を引き起こしたものと考えられる。だが、その共鳴は日本のそれと振動数を全く同じくするものではない。その共鳴の典型と見做されがちな拒俄義勇隊ですら、日・英と連合してロシアを拒む路線を斥けていたように、既に一定の変調作用、すなわち帝国主義から中国の民族的利益を擁護する立場が働いていた。従って、もはや中国の知識人のナロドニキへの接触が日本を経由して行なわれた事の意味を深く穿鑿する意義はない。それよりも、ナロドニキへの接触が中国の革命運動史にいかなる新しい段階を画したのか、それが重要であろう。

彼らは一九〇二年までに日本の明治維新史、フランス、イギリスの革命史、アメリカの独立史に関する知識を獲得して、彼らの政治議論に組込んでいたのである。極く大まかな図式化をすると、フランス革命から民権思想と共和制を、明治維新から富国強兵策を学んでいた。それに加えて更にロシアにおける強権的専制国家に対する反政府・反権力闘争の力強い展開を知ることになった。既に過去のものとなっていた西欧近代革命史の知識よりも、現に進行しているロシアの反政

府・反権力闘争のニュースの方が、彼等をはるかに強く鼓舞する効果をもたらした。楊毓麟は「今、世界各国の中で破壊精神が最も強盛なる者は、ロシアの無政府党に如くはなし」と言う。[6] ここに、西欧の近代革命、アメリカの独立史が過去の歴史上の事件の知識として、背後に去り行く車窓の景色のごとく中国の急進的な知識人革命家の脳裏から色あせたものになり、新たにロシア革命の胎動が魅力あるものに映じる最初の瞬間を見いだしたい。このように中国知識人のナロドニキへの関心は、中国革命史に新段階を画する意味を内包しているのであるが、ナロドニキの受容については今一歩の慎重なる考察を要する。ナロドニキへの関心の第一の側面は、まず現に進行しているロシアの国内の反政府・反権力闘争への共感として現出してくる。当時の中国における最も急進主義的な政治新聞『蘇報』紙は、ロシア国内の政治運動の情報を、日本の各紙からの転載記事であるが、刻々と報道している。また、前述の「俄人要求立憲之鉄血主義」なる政治評論もその好例であろう。その共感は、ロシアの革命的伝統に対する歴史的知識を獲得することによって、英雄的役割を果した個人の賛美となって現出する。そこに、第二の側面がある。英雄主義と結合したことは、さして理解に困難ではない。積弱の淵源である文弱の徒たる知識人が、一人一人、尚武精神をもって状況に自覚的にたちむかわない限り、民族競争の時代にあっては亡国滅種の惨状を回避しえないという思想状況、すなわち広く言えば『新民説』的、狭く言えば「軍国民主義」的思想状況とも称される個人の役割を重視する発想が普遍化していた。虚無党人の伝記が登場したのは、この文脈において理解できる。第三の側面は、この点こそ後期軍国民教育会を特徴づけるのだが、ロシアのナロドニキの実践的受容となって表出する。この段階では、決して思想的受容と言うべきものを見出しえない。とは言え、彼らがナロドニキについて思想的水準における検討を回避したことを意味するものではない。極めて平板に言えば、ナロドニキの掲げる政治理念の中国への適用に反対する議論を経由しながら、専制君主国家における反政府・反権力闘争の手段として戦略・戦術のみを学ぼうとする。いわば実践的受容としての中国のナロドニキの原型が形成される。その代表的議論は、『蘇報』の論説「虚無党」にみられる。この評論文は、中国人がロシアのナロドニキについて中国の政治的実践と結びつけて論じた最

初のコメントである。大意を意訳すると、ロシア虚無党の主義には、民族競争の時代において国家と人種・民族の滅亡が必然であるという観点（＝社会進化論）が欠如しているので、異民族支配と列強の領土分割に直面している中国の場合にあっては、そのまま採用できない。ただ反政府闘争の手段としてバクーニンのやり方を採る、と言うのである。[7] この論拠は清末政治思想史上における一つの重要な論争点になって行くが、ともかく政治理念と政治闘争の方式を切り離して後者のみを採用しようという主張である。ナロドニキの政治理念と戦略・戦術を分離することは、一種の便宜である。だが、彼らはこの段階でそれを意識的に区別した。それは、一つの問題を残した。無政府主義、社会主義の理論の純粋受容を主張する論陣が後に生まれてくるのである。評論「虚無党」に示されるようにナロドニキの政治理念を社会進化論の世界観を以て否定する論理は、一九〇五年以降のいわゆる『民報』時代における民族主義派と無政府主義派の論争につながってくる。民族主義者は、社会進化論に基いて二十世紀を民族競争の時代として把握し、漢民族を主体とした民族国家建設こそ、二十世紀の世界に適者として生存しうる唯一の路であると考えていた。従って、政治理念としての無政府主義に対しては、中国の当面の問題解決にとって何んら役立たないものであるとの姿勢をとった。この様な民族主義派の考え方に対して、一九〇三年の段階では、張継の翻訳『無政府主義』の出現を除いて、アナーキズムの純粋受容を訴える積極的な主張は聞かれなかった。彼らは当面の政治的課題の実践に熱心であればあるだけ、政治理念の机上討論には不熱心にならざるを得なかったのであろう。彼らは政治理念の議論よりも、一日も早く満州王朝を打倒することが必要であるとの共通認識に立っていた。そのためにバクーニンに代表されるロシアの革命運動から摂取しうる反政府闘争の方式の採用に関しては、逆に極めて熱心であった。このような状況にあっては、政治的実践の中での具体的戦術をめぐる対立関係の発生こそが、民族主義の戦列から理念的に純化した無政府主義者が分岐する要因とならざるを得なかった。この点の詳細は、別の機会にとりあげることにしたい。

ところで、近代アナーキズムの政治理念を純粋受容し、それに立脚して民族主義者のロシアのナロドニキ評価の根底に

ある社会進化論を批判する戦列が台頭してくる一九〇五年以降の状況を念頭において、ロシアのナロドニキの戦術レベルでの採用と政治理念の受容とを意識的に区別して論じてきた。だが、そのような区別は必ずしも妥当でない。個々の問題点が残されるにしろ、巨視的にみてこの時点でロシアのナロドニキの影響をうけて中国型ナロドニキが成立したと思われる。ロシアのナロドニキそのものはロシア的土壌に開花した、いわば特殊ロシア的産物であることは言うまでもない。しかも、その政治理念に至っては極めて多くの変種を包含している。にもかかわらず、ナロドニキと総称される限りその共通項を持っていると言わねばならない。それは、ヨーロッパ先進諸国に対して後進の状態にある祖国の惨状を変革しようとする急進的知識人層が、自国の伝統的社会構造の中に革命主体の萠芽を発見し、いまだ客体としてしか存在しない社会層を徹底した啓蒙活動を通して革命主体に転化させようと試みたものである。そして、そのような人民の意識変革・社会変革を通して、単にヨーロッパ先進国の水準においつくのではなく、民族的伝統をバネにして、それを超えたより次元の高い社会を創出しようという知識人層の空想と願望に満たされていた。ロシアのナロドニキに関して、このような共通項の抽出と世界史的普遍化が許されるならば、ロシアのナロドニキからスラブ主義的特質を一切除去して、その普遍的要素を中国的土壌に適応させようとする試みは、かえって文字通り真の意味での中国のナロドニキを成立させた、と言えないだろうか。中国の急進的知識人は、一九〇三年にロシアのナロドニキの多種多様な政治思想を生硬な中国語に直訳して縷々議論をするよりも、それをロシア的なるものと斥けて、斥け方に問題が残ったとしても、反政府・反権力闘争の戦略・戦術としてロシアでの経験をよく熟した母国語に翻訳することにはるかに熱心であったことが、かえってナロドニキの戦術思想を中国に移植することになったのではないだろうか。

そこで、中国近代史上において最初のロシア・ナロドニキの移植がなされた後期軍国民教育会、就中ナロドニキ移植の第一人者で、かつ暗殺団の中心人物である楊毓麟について論じたい。改革意見書と並ぶ後期軍国民教育会の重要文献であると見做される「民族主義之教育」という論文は、彼の作であると推定されている。[8] 同論文は、拒俄義勇隊の段階におけ

る軍国民教育論を批判的に総括しながら、ナロドニキの中国への実践的移植を論じたものである。まず議論の前提となる義勇隊の批判的総括という点に関しては、改革意見書よりも透徹した認識に達していた。改革意見書は、拒俄義勇隊の運動が清朝統治下の領土保全、すなわち満州族の私産を保つものであるとの批判に答えた文書である。しかし、それは批判者の側の曲解を釈明し、批判者と同じく排満復仇論の観点を鮮明にする旨を表明するに止まっていた。楊毓麟の場合は、排満復仇論を用いず、軍国民教育論の根底概念から説き起こしている。要約すると、まず第一段階として民族の主体形成のための民族教育があるべきであり、第二段階として民族国家の建設に進んで国民教育が必要になってくる、と言う。第二段階へ移行してからなされるべき国民教育を先にすれば、「国誰氏の国たるかを知らず、民何の一種族の民たるかを知らず」ということになり、非支那民族（満州族）の奴隷であることをまぬがれない、と言うのである。彼はここに於て、近代ブルジョワ国家のナショナリズム形成の歴史過程を、素朴ながらも法則的に把握している。それによって、梁啓超の「新民説」を貫く国家有機体説の如き国家論が、清朝に適用されて満・漢矛盾、支配・被支配の矛盾を隠蔽する危険を衝いて批判しているのである。満州族は祖先代々の仇敵であるという漢民族の種族主義とも言うべき排満復仇論に拠らないで、梁啓超の得意とする西欧近代政治史の土俵に踏み込んで論理を展開したという新らしさがある。国家有機体説的な国家理念のもとに、国民としての義務を強調する国民教育（列強との対抗関係から軍国民教育）を推進すれば、現実には清国の国民としての義務の強調となり、清朝への帰属を深めるにすぎないという論旨である。彼はここに於て国家論の範疇に立ち入って行ったのである。ところが、国家論の範疇に立ち入りながらも、ロシアのナロドニキ諸潮流の国家論、とりわけ無政府主義を全く参考にしていない。そればかりか、この様な形で軍国民教育論の根底概念を再検討して、漢民族を立国の基礎とする民族建国の結果としての国民教育、すなわち「支那民族軍国民教育」を推進すべしとしたのである。このように民族国家の建設を主張することによって、ロシアのナロドニキの一大潮流であるバクーニンの無政府主義の受容を斥けたことが明確になった。しかしながら、無政府主義を斥けたこと自体は何んら強調するに価しない。その斥け方の中に、

問題の核心がある。そこで『蘇報』の論説「虚無党」にもどると、ロシアのナロドニキには、我国のような異民族支配と帝国主義列強の領土分割の問題に対する観点がない、と言う主張が想起される。まず異民族支配の問題について述べると、ナロドニキが大スラブ主義的体質を脱しえず、被抑圧諸民族の問題を視界に収めていないという明確な批判を持っていたとは考えられない。しかしながら、ロシアのナロドニキが民族問題というカテゴリィを欠落させている事自体については、中国の現状に照して批判していたといえる。ロシアも中国も仮りに便宜上複合多民族国家とすれば、漢民族革命家の場合には被支配民族の位置にあったことがナロドニキの民族問題の欠落を批判せしめる最大の要因であったと考えられる。これが、ナロドニキの政治理念を参考するに価しないとした第一の論点である。第二の論点は、ロシアのナロドニキには亡国の観点がないという主張である。彼ら中国人革命家の言う亡国とは、帝国主義の時代である二十世紀において不可避的に迫りくる現実的危機であるとの共通認識に裏づけられたものである。「帝国主義とは、二十世紀の民族競争の大主義なり。帝国主義とは、二十世紀の歴史の総骨幹なり。」[9]という言葉に示されるのが、当時の、広く言えば辛亥革命運動における〝帝国主義論〟であった。それは、社会進化論のドグマであるが、帝国主義の時代に民族として生き残るためには、強力な民族国家の建設が叫けばれた。従って、彼等の間でロシアのナロドニキに亡国の観点がないと言うのは、無政府主義が理念そのものとしては二十世紀という帝国主義時代にあっては適合しえないとすることと同義的意味を持っている。主として十九世紀のロシアの革命運動の経験から、彼らが帝国主義に関して何んらの示唆を得ることが出来なかったことは、歴史的にみて極めてむしろ当然の事である。帝国主義との対抗関係を前提とする民族国家建設の必要、それが無政府主義の受容を拒む第二の論点である。これら二つの論点からナロドニキの政治理念の受容に否定的であったことは、中国人革命家がロシアの革命運動のレーニン主義的段階への発展の必然を、理論的に粗雑であるが、彼らを取りまく政治状況の鋭く衝きつける問題を通して直観していたからにほかならない。社会進化論を以て帝国主義の問題を語っている所に一定の理論的限界があるが、ナロドニキの政治理念の直訳的受容を棚上げした二つの理由は、決して忘却されるべきではな

い。

かくして楊毓麟は更に続けて清朝打倒の実践的施策を論じるが、ここに至って、彼はナロドニキの運動経験を踏まえて、その戦術思想を中国革命の大河に解き放とうとする。ロシアのナロドニキの場合、そのスラブ主義的体質と表裏の関係をなす伝統的社会構成、ミール（農村共同体）に革命的要素を〝発見〟し、それに規定された農民を革命主体に転化せしめる知識人の啓蒙と政治的激発、そこにナロドニキたる所以がある。楊毓麟の場合、ロシアのナロドニキが結果的には農民の啓蒙に成功しなかったことを考えた上での事かどうか不明であるが、ミールに代えて「秘密社会」すなわち下層民衆（主として農民）の政治変革のエネルギーに充満された秘密結社である会党に着眼している。「支那の労働社会・軍人社会の大半は秘密社会の間に出入す、而して軍人社会・労働社会を以て秘密社会と相い援引すれば、則ち自ら抜くべからざるの根拠をなす」と言う。中国では貧農層、鉱山・運輸労働者、下級兵士の多くが会党に属している。その会党と連携し反清革命に利用しようとする発想は、何も楊毓麟に始まったことではなく、革命家の間では、普遍的認識となっている。しかし、それをロシアのナロドニキ運動との照応において位置づけたのは、彼を以て最初とする。彼は中国の底辺の下層民衆の前期的前衛とも称されるべき闘争力との提携と知識人の側からの啓蒙の必要を語る。「秘密社会と伍をなし、その旧思想を転移せしめて、これに注入するに新思想を以てし、その旧手段を転移せしめて、これに注入するに新手段を以てす」と述べ、その啓蒙の方法として通俗的講演会への結集、通俗的政治宣伝文の流布の二つを挙げる。そして会党勢力を主体とする「下等社会」に対する啓蒙宣伝活動を展開して「根据地」を形成するには、知識人・学生によって構成される「中等社会」を活動舞台とし、かつそれを前衛的戦線とするべき旨を説いている。彼の「中等社会」に対する組織方針を要約すると、まず第一に「特別の団体」と称するものを設ける。その団体は、活動分野、手段、意見の相違によって各々の小団体に分かれるが、方針と主義の一致がなければならない。第二に、各小団体を統括する「公共の機関」を設ける。そして機関紙の秘密出版を行ない意志の統一をはかると共に、巾広い結集方法を取ることが重要であると言う。更に、ロ

シアのナロドニキの勢力拡大過程に言及して、ロシアの革命は「空天鼓吹の時期」（『新湖南』では「革命文学の時期」）から「遊説扇動の時期」へ、「恐怖暗殺の時期」へと発展したと言い、中国においても鼓吹→扇動→暗殺のプロセスが不可避であることを示唆している。彼のこの様な実践の方針をみると、明らかにロシアのナロドニキの経験を指針としていることが判明する。ロシアのナロドニキにおける宣伝主義者とテロリストの対立にみられるが如き欠陥をみて、巾広い結集と共に方針の一致をはかり、ロシアの轍を踏まない様にしようとする配慮が感じられる。また、農村共同体に代えて会党を根据地にしようとした事も、ナロドニキの経験を中国の条件に適用して受けとめようとするものであろう。ここにおいて、前節でみた後期軍国民教育会の組織体制の政治思想的背景が了解されるであろう。すなわち啓蒙宣伝工作を担当する「鼓吹部」、地域的暴動工作を担当する「起義部」、要人の暗殺工作を担当する「暗殺部」の三部分編成の組織体制は、ロシアのナロドニキの経験、主として人民の意志党から学んだものである。そして「実行員」という名称も、ロシアの『ナロードナヤ・ウオーリア』（人民の意志党）における「実行委員会」に準じたものであろう。[10] このように暗殺団の主宰者・楊毓麟の論文を通してみる限り、後期軍国民教育会の活動はロシアのナロドニキの戦術思想の中国への最初の移植と考えられるのである。しかし、中国にナロドニキが登場してくる事は、単に外からの影響だけでは説明がつかない。中国社会の内部における知識人層の役割が持つ伝統の力とその変容から、中国のナロドニキ型知識人が発生してくると思われる。本節で論じえたのは、その意味では問題の一端緒にすぎないことは言うまでもない。

① 前出、小野川秀美「劉師培と無政府主義」。

② 『逸史』第三集「開国前海内外革命書報一覧」には、「無政府主義、癸卯、上海、張継」とあり、張静廬輯註『中国近代出版史料』初編一七四頁にも「無政府主義、張継訳、九〇三年刊、一冊」とある。張継の翻訳した原書は不詳。譚彼岸の前出論文では、「イタリーの馬拉跋（マラスタ）士達（スタ）の『無政府主義』を翻訳した」と言っている。但し、典拠は不詳。

③ 『新湖南』にロシア・ナロドニキ関係の記述がみられることを、初めて重視したのは譚彼岸である。

④ 『湖北学生界（漢声）』第五期の出版広告に、「是書為日本烟山専太郎所編、於俄羅〔斯〕虚無党原因、実言之最詳、……大湖南北同盟会啓」とある。訳者は不詳。但し、楊毓麟の翻訳とみて誤りなきものと

考える。大湖南北同盟会なるものの実体は、同広告欄に「『清俄の将来』出書、三戸遺民（楊毓麟の筆名）編訳」とあることからみて、楊毓麟の関係する団体（もっとも看板だけのもの）である。楊毓麟の執筆した『新湖南』に、ロシアの虚無主義は革命文学の時期から遊説煽動の時期へ、遊説煽動の時期から暗殺恐怖の時期へとなった、と説いている。煙山専太郎『近世無政府主義』、東京専門学校（早稲田大学の前身）出版部刊、明治三十五年（一九〇二年）五月、同書の前編「露国虚無主義」の第三章は「革命運動の歴史」、其一、革命文学の時期、其二、遊説煽動の時期、其三、暗殺恐怖の時期、との構成になっている。このように原著の術語と全く一致している点からみて、楊毓麟は煙山専太郎の著書によって、ロシア・ナドロニキの知識を得ていたことが判明する。なお、楊毓麟にとって煙山専太郎の存在は身近なものであったろう。何故ならば、当時、彼は早稲田大学に在学していた（『逸史』第二集「新湖南作者楊篤生」）。また『浙江潮』にあらわれた虚無党関係記事も、同誌の編集者、王嘉渠がやはり早稲田に在籍しており、早稲田大学を舞台にして、煙山専太郎の線から中国にロシアのナロドニキに関する知識が将来されたものと思われる。従来の通説では、金一（金天翮の筆名）が煙山専太郎『近世無政府主義』によってロシア虚無党の歴史を学び、『自由血』を草し一九〇四年に出版されたのが系統的紹介の最初だと言われている（小野川、譚各論文参照）。おそらく、その際の『近世無政府主義』は、楊の手になる中国語訳『俄羅斯虚無党』も含むものと考えられる。『近世無政府主義』は、単にロシア虚無党史の記述だけでなく、前編の七章をロシア虚無主義の解説にあて、後編の三章で欧米列国に於ける無政府主義の紹介にあてている。ところが譚氏によると、『自由血』は八章に分け、主に虚無主義の起源と活動を叙述している、と記している。従って『自由血』は、煙山の原著の部分訳である。おそらく、煙山の原著の前編部が楊毓麟による翻訳『俄羅斯虚無党』となって出版され、それを参照して『自由血』が執筆されたのであろう。なお、訳書『俄羅斯虚無党』については、本稿が始めて取りあげたのであるが、将来、『俄羅斯虚無党』の原本が発見され、『自由血』の原本、煙山の原著と対照する機会を得れば研究の密度と水準が向上するであろう。

⑤ 煙山は、「虚無主義なる文字は虚無を意味する羅典のニヒルより来りし語にして」（二頁）、「虚無主義は一の暗黒なる否認主義なり、破壊主義なり、露国に特有なる一種の革命論なり。」（三頁）、と述べている。その基礎視角から、ナロドニキの運動史を叙述している。

⑥ 『新湖南』第五篇「破壊」。

⑦ 原文では、「夫俄之有虚無党也、不過以国家社会之不完善謀改造之、以増進国民之幸福而已。其他種族之感情亡国之観念無有也。倘所謂虚無党者、或経異種之勒抑、或見列強之瓜分、如我国今日之経験、其手段其方法、又当何如。……嗚呼、吾欲無言、吾但取其一方針、其所以対待政府者、以問巴枯寧（バクーニン）其人。巴枯寧（バクーニン）其人其聴者。」となっている。

⑧ 前出、譚彼岸論文。「民族主義之教育」は、『游学訳編』第十冊（一九〇三年九月発行）の巻頭論文である。譚氏はこの文献を軍国民教育会関係の重要文献であることには言及していない。ロシアのナロドニキの「到民間去」（ヴ・ナロード）の精神が現われていることのみを指摘している。

⑨ 『浙江潮』第六期、附録「新名詞釈義」

⑩ 煙山の原著では、「人民の意志党」と言わず「民意党」と訳しているが、「実行委員会」の訳語は既に使われている。その民意党の組織に言及した同書一三六頁の記述は、楊毓麟の組織方針に関する記述と内容的にも術語の点でも殆んど一致している。

三　華興会と光復会の発足

七月五日の改革意見書を結集軸として再編された後期軍国民教育会は、「有事の秋に備う」[1]と陳天華が決意を表明していたように、一九〇三年秋になるとその活動が一段と活発になってくる。「有事の秋」とは、日露開戦が必至となる三年末から四年にかけての情勢を意味する。「一九〇三年十～十一月（癸卯十月）、日露戦争がまさに勃発しようとしており、我々は戦争が必ず長びくと考えた。これは中国革命の絶好機だった。」、沈瓞民はこのように回想している。[2]回想にありがちな過去の事実の誇張に留意せねばならないが、もし日露戦争の勃発が中国革命の絶好機であるとの認識が革命家の間で普遍化しており、その認識に基いて華興会が結成されたことを積極的に肯定せざるをえないならば、ロシア、日本のみならずヨーロッパの日露戦争をめぐる社会運動史の相互比較の問題として、極めて重要な課題を今後の研究に提起することになる。そこで、何よりもまず日露戦争の開戦の前後における中国の在日革命家たちの動向を可能な限り跡づけ、沈瓞民の回憶の正否を検討してゆきたい。

まず東京に在留する留学生の動向をみると、十一月三十日附の日本外務省保管記録文書には、日露間の情勢急迫するに及んで、弘文学院に在学する留学生の間に「予等日本に留学スルモ、一念茲ニ至レバ、祖国ノ為メ学事ニ専ラナル能ハズ。一同帰国シテ大ニ護国的運動ヲ試ミタシトノ志望ヲ興シ、意見書及対露問題ニ対スル日本官民ノ情況等ヲ頻々本国ノ当路者ニ伺テ報道シツツアリ。」との状況が生まれていた。[3]拒俄義勇隊に突出したエネルギーは、ここに於いても依然として健在であった。しかし、この史料が後期軍国民教育会の消息を伝えるものとは速断できない。そこで、湖南省出身者について動向を窺うと、弘文学院速成師範科に在学していた陳天華、劉揆一の二人が、この時実行員として帰国しているのである。[4]両名が弘文学院の在学生である点からみて、前述の外務省文書にあらわれた動きは後期軍国民教育会のものと判明する。『陳天華殉国記』によると、陳天華は日露開戦の急を見て国難が切迫したと判断し十一月に帰国したとのことであ

る。劉揆一は『黄興伝記』[5]に、自からの帰国を十一月と記している。両者ともに十一月と言うのであるが、陰暦十一月をさしているとみるのが妥当である。また前述の外務省文書から判断すると、十一月三十日（陰暦十月十二日）現在では、帰国の意志表示を表明した段階に留まり、未だ帰国するに到っていない。よって両名の帰国は、癸卯十一月、すなわち一九〇三年十二月十九日より翌年一月十六日の間のことである。両名の帰国の目的は、外務省文書の指摘は表面的なものであって、実際は華興会の結成大会に参加する為である。一方、浙江出身者の間では、浙学会の名称で開催された二回にわたる革命実行のための秘密会議の動きがあった。まず第一回の会合は、十月に開かれ、ただ革命宣伝工作を強化するためだけでなく、暴力を用いて武装蜂起を起すこと、別に秘密革命団体を組織することを決定したと言う。そして、湖南、浙江あるいは安徽のうちから一省を選んで武装占領して根据地とし、さらにそれを拡大してゆかねばならないと考えていた、とのことである。第二回目の会合は、十一月に開かれ、根拠地を奪取するために陶成章を浙江へ、魏蘭を安徽へ、龔宝銓を上海へ、沈飛民と上海に居た張雄天を湖南省長沙に派遣することを決定した、と言う。長沙への派遣の目的は、該地で武装蜂起を計画していた華興会の中心人物、黄興と連絡をとるためであったとのことである。[6]このように日露戦争の風雲急を告げるに及んで、湖南グループのみならず浙江グループも、長沙にむかって求心的行動を開始していたことが判明した。特に浙学会の名称による第二回目の会合は、第一回目に比して、黄興が湖南で華興会を結成したとの情報を基にして方針が具体化されていることが注目される。すなわち、後期軍国民教育会の分省起義路線が愈々軌道に乗り始めたのである。そこで華興会の結成に眼を転じて、事実関係を整理しておこう。その中心人物である黄興は、六月四日に日本を出発[7]、上海に滞在し[8]、武昌を経由[9]して長沙に帰って、明徳学堂で教師をするかたわら、華興会結成の諸準備を推進していた。十一月四日（旧暦九月十六日）、黄興三十歳の誕生日の祝賀の名目で彭淵恂の居宅において、同志を集め華興会を結成することを確認した。華興会結成の日付については、諸説紛々としているが、彭淵恂の居宅での会合を第一回のものとするのは、黄一欧、周震鱗、章士釗の回想録では全く一致している。[10]但し、日付と人数の点で若干の異同があり、また出席しえない

筈のものを加えているので全てを信ずるにたらない。おそらく、華興会の如き組織を結成するという基本方針は、『蘇報』案の直後、すなわち七月中旬には確定されていたのであろう。後期軍国民教育会への改組の後、すなわち八月下旬から十月中旬の間に秦毓鎏を交じえて彭淵恂宅で第一回の会合が開かれた、と章士釗は言っているが、黄一欧と周震鱗の言う十一月四日の会合を第一回とする説を含めて、十数名から二十数名規模の準備会が数回開催されたと思われる。十一月四日の会合では計画が相当程度に具体的に進展し、その結果、陳天華、劉揆一の帰国が要請されたのであろう。そして、浙学会を名乗る軍国民教育会の浙江グループの第二回目の秘密会議にも華興会結成の情報が伝えられ、沈爬民、張雄夫の長沙への派遣が決定されたのであろう。一九〇四年二月十五日(光緒二十九年除夕)、遂に明徳学堂理事である龍璋の西園住宅において華興会の結成大会が開催されて、方針と任務の分担が正式に決定されたのである。[11] 日本のロシアへの宣戦布告に後れること、わずかに五日。この事は、すべて予定の行動であるとはいえ注目に値する。否、むしろ予定の行動であるがゆえに、重要な意味を持つ。すなわち、拒俄義勇隊の発足以来、彼らが絶えず日・露間の情勢の推移を念頭において行動してきた結果として、この時点で華興会が正式に結成されたのである。拒俄義勇隊以来、変法派の日・英と連合して俄を拒む路線を斥け、日・露のいずれが勝ちいずれが敗れるとも中国の領土分割をもたらす、との危機感に支えられて行動してきた結果である。帝国主義間の戦争である日露戦争の勝敗の帰趨に自己の命運を従属させることなく、自己の力によって帝国主義列強の管理下にある清朝政府・「洋人の朝廷」(陳天華の言)の打倒をめざして、大胆に踏み出して行ったのである。上海においても蔡元培らが中心となって、ロシアの動向に焦点をあて対俄同志会を結成し、一九〇三年十二月、同会機関誌『俄事警聞』が発刊されており、後述するように華興会と密接な連絡が保たれていた。このように、中国の革命家たちは、日露戦争を単に被害者的危機意識だけで把握するのではなく、中国革命の絶好機と把握して行動していたことが判明した。すなわち、華興会結成の意義は、ロシア、日本、ヨーロッパの日露戦争をめぐる社会運動の一角に確たる位置を占めていることにおいてこそ評価されるべきであろう。

次に、華興会の基本戦略を示す最も代表的な見解である会長・黄興の結成大会における演説を手がかりにして、華興会と光復会が何故に異なった組織体質を獲得して行くことになるのかを検討してみたい。黄興の提案は、「本会は全て革命を実行する同志ばかりだから、決起の地点と方法を討論して、適切な方針を決めておかねばならない。一つの方法は、首都北京を陥落し瓶の水を高いところから流すように地方に波及させることである。フランス大革命がパリから、イギリス大革命がロンドンから勃発したように、しかし、イギリス・フランスのは、市民革命であって国民革命ではない。市民が都市で成長し専制政治の苦痛をうけたので、決起して闘かうことが出来た。我々が革命しようとするならば、北京の安逸を貪っている無智の市民に頼って満州族の朝廷を撲滅できないのであり、異族の禁衛隊と共謀合作することもできない。すなわち我々の起義は、まず一省に雄拠して各省とともに起ち上る方法を取る以外にない。[12]」と言う。ここに於て注目される事は、彼らの目指す中国革命はヨーロッパの近代市民革命とは異質の型であるとの認識である。中国の革命は都市において政治的成長をとげた市民階級の革命ではなく、「国民革命」として構想されねばならない、との主張を言外に含んでいる。もっとも「国民革命」という場合の「国民」の概念は、理論的には極めて粗略である。都市の市民に対置して語っているから、非都市住民の意であり、都市とは首都の意味で語っているのであるから、首都の住民を市民とし、非首都住民を国民と称しているような印象をうけるけれども、そのような理論的粗雑さを云々するよりも、少なくとも地方から首都を包囲する革命戦略が定式化されたことに注目すべきであろう。ヨーロッパのブルジョワ市民革命の類型と全く異なるものとして、中国革命の原型を設定した意義は高く評価されるであろう。しかし、それは黄興の発案ではなく、楊毓麟『新潮南』が基礎にある。それを毛沢東の革命戦略の歴史的原型とすることには慎重でなければならないが、楊毓麟のロシア・ナロドニキの戦術思想の受容と共に毛沢東の時代に先行する湖南の革命家の摸索した中国革命の原型は、今後の綿密なる検討が要請されるであろう。今はこの点を別にして、黄興提案の背後の事情を考察しておきたい。黄興が何故、西欧型の革命と中国の革命が異なるものであると強調したのかというと、おそらく彼らの間でこの点に関する議論が実際に

交されていたからであろう。この華興会の結成大会に参加している張継は、前年六月に、首都における革命、すなわち西欧型「中央革命」の必要を強調する論文を発表しているのである。[13] この点に注目するならば、黄興提案が単なる一時の思いつきではなく、その提案の背後に革命の方式をめぐる論争が伏されていることが推察できよう。張継の主張は、イギリス・フランスの革命が首都より発したものであるから、中国の場合も同様であるという論法であった。このような中央革命論を少数意見として斥けたという背後の事情を読み込んでこそ、始めて黄興の提案の意味が釈然とする。このように「中央革命論」を斥けながら、黄興は更に「いま湖南について論ずると、軍隊と教育界で革命思想は日に発達を見ており、市民もだんだん自覚してきている。その上、我々と同じく排満の立場にたつ洪会党の人々もすでに結集している。ただお互いに尻ごみをして、あえて先に起とうとしていないだけである。まさに爆弾が準備されて、我々の点火を待っているような状態である。だからもし連合して時機をみて会党より或いは軍隊・教育界より事を起しお互いに協力すれば、湖南を根拠地とすることは困難ではない。[14]」と語っている。楊毓麟の論文「民族主義之教育」と黄興提案を比較すると、詳論するまでもなく、基本的には殆んど同一の文脈に位置づけられる。しかしながら、楊毓麟がロシアのナロドニキから導いたところの鼓吹→扇動→暗殺の発展図式を中国にあてはめ、自から先頭になって主宰した暗殺団の役割については、極秘事項であったのであろうが、全く黄興の言及する所ではなかった。それどころか、章士釗の回憶するところによると、楊毓麟は暗殺の必要を認めたが黄興はそれをあまり積極的には支持しなかったという。[15] 何故、黄興が暗殺を斥けたのか？ それは、黄興の主観でもあり、また華興会の会員たる基礎とする、いわゆる「中等社会」の体質でもあろう。しかも単に暗殺団を斥けただけでなく、劉揆一によれば、「下等社会」との連合すなわち華興会の場合には哥老会との提携ということになるが、それを好まない会員が多く華興会とは別に連絡機関として同仇会を設けたという。[16] 従って、楊毓麟が主導した中国型ナロドニキ戦術は、華興会においてその構想の通りには、受け入れられていないことが明確になった。この様なプロセスを通して成立した華興会については、その組織体制の全般に関してより綿密なる考察を加えて、華興会の特質を抽

出せねばならないが、問題が多岐にわたるので割愛せざるをえない。本稿の主たる目標からして、華興会の成立に際して楊毓麟らの後期軍国民教育会の暗殺団が少数派として湖南の革命運動の主流から斥けられたという事情を知りえただけで十分である。かくして暗殺団は少数派となったのであるが、華興会主流派から組織的に排除されたのではない。劉揆一によると華興会の任務分担として楊毓麟と章士釗の二人を南京と上海方面の工作にあたらせたという。[17] その章士釗によると、華興会とは別に上海に愛国協会なる組織を設け楊毓麟を責任者とし自分が副責任者となって、蔡元培、陳独秀、蔡松坡らの加盟を得たと言う。[18] 小野川氏が「愛国協会は暗殺への傾向を色濃くもっていたように見える。[19]」と推定されているように、愛国協会は後期軍国民教育会の暗殺団と密接な関係を持っている。華興会の側から愛国協会を設置した目的をいうと、安徽、浙江の革命運動家との連絡をとるためであった。しかし、楊毓麟の場合は必ずしもその目的のためだけに活動していたとは考えられない。一九〇四年夏、天津に秘密機関を設け北京に潜入して西太后と光緒帝の暗殺を企図して実行に移ったが、計画の達成に失敗し上海へ帰って来たと言う。[20] この計画に干与したのは、蘇鵬、周来蘇、張継、何海樵である。[21] 楊毓麟は上海に帰ってからも、爆弾製造所を設けて活動を続けたと言う。[22] 後に楊毓麟はテロリストの多くがピストルの使用を主張した段階になっても、依然として独り爆弾を用いることを曲げなかったという。[23] 私はそこにロシア・ナロドニキの最初の紹介者として、ロシアでの経験をそのまま機械的に中国に再現しようとした彼の心情を読みとる。蔡元培は、楊毓麟の暗殺活動の顚末について最も詳細なる記録を残していることからみて　テロの実行に参加しなかったが、強い関心を寄せていたことは否定できない。彼は、創刊以来編集の任にあった『警鐘日報』社を一九〇四年七月二十一日に辞して専ら愛国女学校の仕事にあたっているが、[24] その目的は婦人テロリストの養成にあったと言う。[25] 一方、浙学会を名乗っていた陶成章らの活動については、藤田敬一、小野川秀美両氏によって論じられている[26]ので詳論しないが、やはり華興会に並行して会党工作に専念している。以上のような諸点からみると、上海の愛国協会では、華興会の受け入れなかった中国型ナロドニキ運動が、かえって最も純粋に実践されたようである。この点は、華興会と浙江グループ（後の光復会）が同時

的に推進した会党に対する工作において、最も顕著な差異となって現われている。華興会の実質上の政治綱領と目される陳天華の『警世鐘』における会党への呼びかけには、土地問題が全く欠けている。それに比して、陶成章らの会党工作の質を端的に示す「龍華会章程」には、土地公有の主張がみえている。小野川氏は、それを「虚無党の無政府主義に影響されて、土地公有の主張が出てきた、と或は推測してよいかも知れない。」[27]と述べられているが、誠に卓見であろう。それと同様に重要な事は、『民報』時代になってより理論的に純化したアナーキストとして登場する張継はもとより、劉師培も上海の暗殺団と密接なる関係を持っていたのである。[28]それに比して、華興会の主流を形成したグループからは、遂にアナーキストは生まれなかった。

一九〇四年秋、華興会の長沙起義計画が失敗して、主要な活動家が日本に亡命せざるを得ない事態に至って、華興会は遂に事実上の解体を余儀なくされる。なお、この長沙起義の失敗から日本への亡命の経過は、宋教仁の日記にその事情の一端が記されている。ここにおいて重要なことは、楊毓麟と黄興、陳天華、宋教仁ら華興会の主流派との行動の軌跡が明確に分かれたことである。前者は、北京へ行き北方暗殺団を組織している。後者は、日本へ亡命して『二十世紀之支那』社を創り、それを舞台にして孫文と提携し中国同盟会を発足させる。一九〇五年以後、華興会は組織としては、全く存在しない。その会員の大多数が同盟会の会員となったのであるから、厳密に言えば華興会元会員、あるいは元華興会系の同盟会員の政治的系譜として存在したにすぎない。この系譜は、共進会、中部同盟会という形になって一一年の武昌起義に接続してゆくのであるが、華興会が同盟会の段階に移行した時には組織的に解体していたため、共進会、中部同盟会があえて結成されねばならなかったのであろう。一方、一九〇四年末に華興会は唯一の目標である長沙起義計画の破綻により解体するが、その解体が逆に光復会結成の機会を提供したと考えられる。すなわち、華興会は何よりも軍国民教育会の革命運動実践機関なのであり、しかも、中国本土に設けた唯一の最高機関である。上海に設けられた愛国協会は、楊毓麟ら異分子が属するとはいえ、あくまでも華興会の下部機関である。黄興を会長とし、江蘇出身でしかも軍国民教育会改革意

見書の執筆者である秦毓鑾を副会長とし、浙学会を名乗る軍国民教育会浙江グループを指揮系列下においた華興会の組織体制をみれば、湖南省という一省レベルの革命機関と言うよりも、日露戦争という国際情勢を背景にして、全中国革命というネイション・ワイドな政治課題を遂行するために軍国民教育会が設けた唯一の最高機関、それが華興会である。拒俄義勇隊以来、行動を共にしてきた軍国民教育会の会員にとって、少数は多数に服するという組織原則[29]を破ることは出来なかった。「光復会が一九〇四年十月上海で成立して後、陶成章まずは東京の原発起人と協議すべきであると考え、ついにこの年十二月に魏蘭と共に東京に赴き、王嘉榘らと協議した」という。その結果、東京にも光復会の支部が設けられ、周樹人（魯迅）らが入会したというのである。[30]原発起人王嘉榘こそ、軍国民教育会の有力会員である。その協議を要した所にも、軍国民教育会が厳しい組織原則に支えられてきたことを物語っている。

さて、光復会の直接母体となった上海の革命組織とは、一体いかなるものであったか？　まず馮自由の説[31]を記すと、

(a) 軍国民教育会の実行員である龔宝銓が、上海に暗殺団を組織した。

(b) 甲辰（一九〇四年）秋になって、浙江、江蘇　安徽の同志を招集して革命党集団をつくった。

(c) 蔡元培が青島より上海に帰って来て、その事を覗い知り、その会に入ることを求めた。

(d) そこで規約を整備して、光復会と名づけて、蔡元培を会長にした。

以上が、馮自由の創作した光復会成立の筋書であるが、この筋書きは陶成章の『浙案紀略』の脚色である。「（前略）各省軍国民教育会会員もまた多く帰国して上海に居た。軍国民教育会の組織に暗殺団があり、規則は極めて厳密であった。上海の中国教育会会長・蔡元培の覗い知る所となり、その会に入会を求められた。ここにおいて改名し光復会とした。[32]」としか陶成章は述べていない。陶成章が『浙案紀略』に光復会の成立事情を詳しく記さなかったのは機密の漏洩を恐れたためであると、沈瓞民は註記している。[33]すなわち、『浙案紀略』は辛亥革命前の一九一〇年に草稿がつくられたものである。[34]しかし、公刊されたのが一九一六年であるから機密漏洩説は、少し割引いて考えねばならないだろう。というのは、

一九一〇年には光復会と孫文、黄興ら同盟会との間の関係が、敵対的なものに達しており、湖南出身の楊毓麟の主宰する軍国民教育会暗殺団を光復会の母体と明記するのは、都合が悪かったのであろう。従って、単に軍国民教育会の暗殺団とのみ記しているのである。馮自由が脚色したのは、(a)軍国民教育会の暗殺団を龔宝銓の主宰するものとしたこと、(b)蔡元培の青島から上海への帰京を甲辰秋（一九〇四年）としていることである。もし、龔宝銓の主宰する暗殺団と楊毓麟の主宰する暗殺団を全く別個のものとすると、軍国民教育会の暗殺団が上海に二つ同時に存在したことになる。その矛盾を回避するために、蔡元培が暗殺団に関係した時点を、約一年間遅らせて一九〇四年の秋とし、楊毓麟と蔡元培が結びつく可能性を消去したのであろう。最後に、陳独秀と蔡元培の回憶する所を記して、光復会の母体である暗殺団問題の結論としたい。陳独秀は、「私が初めて蔡先生と事を共にしたのは清朝の光緒末年であった。そのとき楊篤生（毓麟）、何海樵、章行厳（士釗）などが上海で爆弾を造ることを習って、暗殺を図る組織をつくった。行厳が手紙で私を招んだので、私は安徽から上海に出て、この組織に加入した。上海に一ヶ月あまりいたが、毎日、楊篤生、鍾憲鬯に従って爆弾の試験をした。このとき〔蔡〕孑民（元培）先生もまたよく試験室にやってきて練習し、協議した」と回顧している。[35] また蔡元培自身も「何海樵君が東京よりやって来て、私を紹介して同盟会に宣誓して入会させ、また私を爆弾製造を学習する小組に入れてくれた（この小組はもともと六人だけのもので、海樵と楊篤生、蘇鳳初（ママ）の諸君がそのメンバーであった）」と回憶している。[36] かくて、光復会の母体は楊毓麟（篤生）の主宰する軍国民教育会の暗殺団であることが、極めて明確になった。

長沙起義計画が破綻した時点、一九〇四年十月頃には浙江グループにとって、華興会の附属機関である愛国協会を存続する理由を失ったのである。また浙江省で拠点工作を行って、華興会の長沙起義に呼応すべく活動してきた陶成章らには、もはや華興会の黄興の指導に服する意味は残されていなかった。規約を整備して、暗殺団を発展的に解消して光復会と名称を改め、蔡元培を会長とし、陶成章が会務の実権を掌握し、東京に居た王嘉榘の了解を得て浙江派独自の路を歩むことになる。だが、北方暗殺団をひきいて楊毓麟は北京に再度進出して、光復会成立後の会史には足跡を残さない。光復会が

スタート・ラインに着いた時、あたかもピストルを以て号砲を発するかの如く、万福華の王之春暗殺事件が起った。万福華の行動に対し、「吾人は虚無党が早くも我が神州に出現したことを祝う」との『警鐘日報』（一九〇五、一、二）時評は、光復会の政治的系譜にアナーキズムの陰影がさらに色濃く宿る瞬間を啓示しているのではあるまいか。

① 陳天華「覆湖南同学諸君書」（『蘇報』六月十四日）。

② 前出、沈欠民「記光復会二三事」。

③ 前出、外務省文書、「乙秘第六七八号、十一月三十日付、清国学生ノ討議」。同文書中、「数日前嘉納郁文館長ノ如キハ、頗ル之レガ慰諭ニ努メタル結果、云々」とあり、嘉納氏経営の弘（宏）文書院関係の記事と判断した。

④ 前出、拙稿「陳天華の革命論の展開」

⑤ 劉揆一『黄興伝記』一九二九年原刊、帕米爾書店一九五二年版）三頁。

⑥ 前出、沈欠民「記光復会二三事」。

⑦ 『黄興伝記』には「癸卯夏五月、公帰抵鄂」とあるが、『国父年譜初稿』上冊、（台北、一九五八年）に従った。

⑧ 黄興の上海滞在中のことは、章士釗「与黄克強相交始末」（『回憶録』二）に詳しい。

⑨ まず武昌に行ったのは、彼が武昌の両湖書院の出身で湖北官費生として一九〇一年に日本に派遣されたからである。帰国すると、両湖書院で演説し、『革命軍』を大量に配布して啓蒙宣伝活動を行っている（『黄興伝記』）。その具体的成果は、宋教仁との結合である。湖南桃源出身の宋教仁は、武昌文普通学堂の学生であったが、黄興に共鳴して八月に長沙に行き共に活動することになった（「宋教仁伝」、『革命先烈先進伝』、台北、一九六五年所収）。これが、宋教仁の辛亥革命運動史に登場する最初の契機である。

⑩ 周震鱗「関于黄興、華興会和辛亥革命后的孫黄関係」（『辛亥革命回憶録』一）、黄一欧「黄興与明徳学堂」、章士釗「与黄克強相交始末」（『辛亥革命回憶録』二）。日付、章氏のみ「癸卯七、八月間」とする。人数と参加者氏名の対照表を掲げる。

章氏説	周氏説	黄氏説	章氏説	周氏説	黄氏説
黄興	○	○	翁友鞏	計20余名	計20余名（氏名不詳10名余）
彭淵恂	○	○	柳大任		
秦毓鎏		○			
劉揆一	宋教仁 ○	○			
	陳天華	○			
	譚人鳳	○			
	柳聘儂	○			
	張繼	○			
	周震鱗	○			
章士釗			呉禄貞	計12名、内湖南10名、他省2名。（氏名不詳4名）	
胡瑛			蘇曼殊		
			陸鴻達		

(イ) 劉揆一、陳天華は、陰暦十一月に帰国したのであるから、参会者に数えるのは誤りである。

(ロ) 更に注目すべきは、湖南出身の革命家である意味では当時黄興よりも大物である楊毓麟の名前が見えないことである。この点は、一つの問題点なので一言しておきたい。

(ハ) 張継が長沙に行ったのは、陰暦十二月である（『張溥泉先生全集』二三頁）。

⑪ 楊世驥『辛亥革命前后的湖南史事』（長沙、一九五八年）一〇〇頁。但し、光緒二十九年除夕とする原史料は不詳である。湖南省志編纂委員会編『湖南近百年大事紀述』（長沙、一九五九年）も、楊世驥の説を採っている。劉揆一『黄興伝記』に従えば、華興会の正式の発足は光緒二十九年十一月以降となるから楊氏の説と符合する。会議の規模、時点からみて、これを正式の結成大会と見做し、章氏、黄氏、周氏の言う会議を準備会とみるのが最も妥当である。

⑫ 前出、劉揆一『黄興伝記』

⑬ 自然生（張継）「由地理上言之、革命有両種、曰中央革命、曰地方革命。何謂中央革命。革命之洪水、以中央政府所在地為起点、而延及于地方者也。何謂地方革命。革命之洪水、以地方為起点、而奔赴中央政府所在地者也。二者之収効同、然其成有難易。譬如走馬、日暮下蘭台、則其勢順、其歩速、高屋建欠、一奔千里、不可遏也。反是由平地而登高山、則覚崎嶇難行、足疲身乏、不免有遅遅之憂。以走馬下蘭台為中央革命之代表語、則平地登高山、可為地方革命之好名辞。由是言之、中央革命也恒易、而地方革命也殊難。（以下略）」と述べ、黄興の提案と全く対立する見解を提出していた。「祝北京大学堂学生」（『蘇報』六月六日号）。

⑭ 前出、劉揆一『黄興伝記』。

⑮ 前出、章士釗『与黄克強相交始末』。

黄興は一九一〇年に宮崎滔天に対し、「それに近年以来吾党の発展と共に吾党の同志が到る処に雌伏して時機を待望して居るので俘肉の歎に堪へぬ連中が、動もすれば、露国式に『農民の中に々々々』を叫び出して、彼等の中に混入せんとする。これを制止するのが、此頃の一大事業で、……」と語っている（『宮崎滔天全集』第一巻五一四頁、平凡社、一九七一年）。

⑯ 前出、劉揆一『黄興伝記』。

⑰ 前出、劉揆一『黄興伝記』。

⑱ 前出、章士釗「与黄克強相交始末」。

⑲ 前出、小野川秀美「光復会の成立」。

⑳ 蔡元培「楊篤生先生蹈海記」（『蔡元培先生全集』、台湾商務印書館、一九六八年）。

㉑ 馮自由「新湖南作者楊篤生」（『逸史』第二集）。

㉒ 前出、蔡元培「楊篤生先生蹈海記」。但し、蘇鵬の記述と若干異なる点がある。（前出、蘇鵬「柳溪憶語」）。

㉓ 前出、馮自由「新湖南作者楊篤生」。「従来失敗に失敗を重ねたる皇帝の謀殺は尽く拳銃を以てせられたるによりき。是に於てか民意の偏執者は此実歴に鑑みて更に其手段を変更するの必要なるを認め、終に之よりダイナマイトを製造して之を使用するに至りたり。」（煙山専太郎『近世無政府主義』、一三七頁）とある点は考慮に値する。

㉔ 「蔡孑民敬白」（『警鐘日報』、一九〇四年七月二十一日）

㉕ 蔡元培「又以暗殺於女子更為相宜、於愛国女学、預備下暗殺的種子。」（「我在教育界的経験」、『蔡元培先生全集』六七八頁）。

㉖ 前出、藤田敬一「『龍華会章程』解説」、小野川秀美「光復会の成立」。

㉗ 小野川秀美、右掲論文。

㉘ 前出、小野川秀美「劉師培と無政府主義」。

㉙ 前出、「軍国民教育会公約」。

㉚ 前出、沈欠民「記光復会二三事」。

㉛ 前出、馮自由「記上海志与革命運動」。

㉜ 前出、陶成章『浙案紀略』。

㉝ 前出、沈欠民「記光復会二三事」。

㉞ 陶成章は、華興会と光復会の成立を対比させて「湖南の楊卓林、黄興等、軍国民教育会会員、帰郷運動を以て徒を結び票を散じ、別に一会をなし号して華興会となす。」と記しているが、楊卓林なる人物は楊毓麟の誤記を印象づけているが、実は全く別人。陶成章自身が暗殺団の全貌を知らされていなかったとも考えられる。馮自由は、光復会＝浙江派の先入観で、龔宝銓という暗殺団員の一人にすぎない人物を以てして光復会の母体としたのであり、その脚色は陶成章の作為に釣込まれたことから生じたものであろう。

㉟ 陳独秀「蔡孑民先生逝去後感言」（採徳中編『蔡元培先生遺文類鈔』、台湾復興書局、一九六一年）。訳文は、増田渉『中国文学史研究』（二九六頁）に従った。

㊱ 前出、蔡元培「我在教育界的経験」。なお、蔡元培は「三十八歳（民国前八年、一九〇四年）、夏休みの後、また愛国女学校の経営をまかされ、私の従弟・国親と龔未生、兪子夷の諸君をさそって教員とした。」と述べている（前掲書）。この龔未生こそ龔宝銓である。楊毓麟と龔宝銓は、蔡元培を媒介にして同一線上に位置していたことが判明するのである。

むすび

一九〇三年から四年における、中国の革命家たちの行動の軌跡と思想的営為に関する以上の分析を通して、次の結論を導くことが可能であろう。

まず、革命運動の組織史に関する基礎事実を整理しておこう。軍国民教育会（後期）は、暗殺（テロ）、起義（クーデター）、鼓吹（プロパガンダ）の三部に分かれて、統一的方針の下に実行員を先頭にして、東京から中国内地各省にむかって行動を開始する。特に湖南省において組織活動が進展して、湖南を拠点とする分省起義体制が確立する。軍国民教育会の中国内地の運動機関である華興会は、一省レベルのものではなく、全中国革命を目指すネイション・ワイドな組織であり、華興会を軍国民教育会の運動の展開という組織史の文脈でみると、華興会＝湖南派という評価は不十分である。また華興会は、その当面の目標である長沙起義に失敗した時点で解体をとげて、厳密に言えば華興会系、もしくは旧華興会の政治的系譜を同盟会時代に継承するにすぎない。一方、華興会が浙江グループとの連絡のために設けた愛国協会を拠点にして、華興会主流派の黄興らとテロ活動の評価をめぐって異見をいだく軍国民教育会の暗殺団が活動する。華興会反主流派に甘んじていた浙江グループと暗殺

団は、長沙起義計画への協力体制をとっていたが、計画が失敗するに至って、暗殺団を母体にして光復会を結成する。光復会の母体となった暗殺団は、湖南出身の楊毓麟が主宰する軍国民教育会の暗殺団である。龔宝銓、蔡元培の加入した暗殺団と楊のそれは同一の組織である。楊が光復会史に足跡を残さなかったのは、彼がロシア・ナロドニキの実績に基いて暗殺の武器としてピストルよりも爆弾の優位性に固執したからである。そのために、光復会の結成の直後、北京に行き、〃爆弾党人〃として活躍する。楊毓麟の暗殺団に支持を与えなかった黄興は、そのことによって同時にロシアのナロドニキに範をとろうとする傾向に反発したことになる。一方、蔡元培はナロドニキの戦術思想に積極的評価を与えることによって、テロリストから革命文学を志向する多種多様な「到民間去」の傾向をもつインテリゲンチャーをその知的・政治的生活に包摂してゆくことになる。従って一つの展望として、華興会の系譜にみられる政治理念、例えば宋教仁、それには五・四運動に直結して行く要素が見い出せないといえる。それに比して、光復会の系譜には、少なくとも辛亥革命に止揚されえないヴ・ナロードの傾向をもつ知的・政治的感受性が懐胎していたと言えるだろう。

最後に、この一連の革命運動の過程に表出したロシア像を中心に、二十世紀初頭における中国の革命家たちの世界史的位置について言及しておきたい。華興会と光復会の組織母体、軍国民教育会は、一九〇三年に結成された拒俄義勇隊から発展したものである。拒俄義勇隊、その名称の示す通り、この一連の革命運動の根底には、当初から帝政ロシアの極東動向に対する鋭い政治的警戒心と危機感が流れていた。だが、彼等の拒俄とは反露ではない。単なる平板な排外主義でもない。彼らの意識の中では、拒俄とは列強の中国領土の分割を拒む謂である。政治的認識の深化、行動の先鋭化に伴なって、日露戦争がその勝敗の帰趨に拘らず中国領土の分割の導火線であるとの危機感に達するだけでなく、湖南における華興会の発足、上海における『俄事警聞』の発刊に示される如く、日露開戦時点では、日露戦争が中国革命の絶好の機会を供するとの政治判断を実践に移すに至っている。すなわち〃侵略の国・ロシア〃の像は、中国の先進的インテリゲンチャーに康・梁派の改良運動と思想的・理論的レベルから一歩進んで実践レベルで訣別する契機を創ったのである。すなわち、彼

らは拒俄義勇隊の段階から日本の《対外硬運動》に誘引されることなく、北京に起った京師大学堂の拒俄上書運動に示される日英同盟に依存してロシアを排斥せよとする改良派路線を斥けて来た。そればかりか、当面の情勢の中で中国にとって危機をもたらす敵国であるロシアの革命運動の経験を摂取することに勉めてきた。後期軍国民教育会こそ、ロシアの人民の意志党をモデルにしたことを如実に物語るものである。すなわち革命の国・ロシアの発見が、そこにあった。しかも、『蘇報』（一九〇三年六月十九日）に載った十九世紀のロシア・ナロドニキに関する最初の本格的評論「虚無党」が出現した。それには、少なくとも中国人革命家がロシアの革命運動のレーニン主義的段階への発展を希求する立場が表出していると考えられる。侵略の国・ロシア、革命の国・ロシア、それらロシア像のネガとポジの二重性に啓示をうけながら、日露戦争に対して不可分の関係に自からをおいて、華興会を発足させ、帝国主義列強の共同管理下にある清朝打倒を志向して行ったのである。われわれにとってロシア、日本、ヨーロッパの日露戦争をめぐる社会運動史と中国のそれを相互比較研究することが、今後新たに要請されるだろう。周知の通り、ロシアではボリシェビイキが誕生し、日本では『平民新聞』が発刊されている。ヨーロッパでは、第二インターの時代である。彼の日露戦争をめぐる社会運動史の栄光と苦渋に満ちた戦列に、中国の革命家たちを参加させることを拒む理由は全く見当らない。時、十月革命の一発の砲声が中国にマルクス・レーニン主義を送りとどける遙か十四年前のことである。

〔補　遺〕

脱稿後、M・B・ランキン（Mary Backus Rankin）氏の光復会について詳細に言及した次の論文と著書を入手した。

"The Revolutionary Movement in Chekiang: A Study in the Tenacity of Tradition."; Mary C. Wright, ed. *CHINA IN REVOLUTION: THE FIRST PHASE, 1900-1913*. Yale University Press, 1968.

Early Chinese Revolutionaries: Radical Intellectuals in Shanghai and Chekiang, 1902-1911. Harvard University Press, 1971.

光復会の成立過程に限って簡単に紹介すると、一九六八年に発表された旧稿では、光復会の母体を浙学会と蒋宝銓の暗殺団に求めるもので、極めて不十分な分析に終っていた。しかしながら、一九七一年最新刊の労作『初期の中国の革命家たち』では、旧稿の不備が訂正されて、組織史の基礎事実に関する限り、奇しくも私の研究と基本的に一致する結論に到達している。なお、光復会と華興会の関係については、協力関係の面を指摘されているだけで、政治思想上の分岐点が生じてくる側面を取りあげていないのは、この間、著者の着眼が浙江の知識人の特質の解明におかれてきただけに、今一つ物足らなさを感じさせる。従って、氏の論稿に拠り本稿に何らの補訂を加えなかった。しかし、浙江派革命家の研究において、氏の著書は最も系統的かつ永準の高いものであろう。今後の我国の辛亥革命研究にも裨益するところ多大であると確信する。

（大阪大学文学部助手・[redacted]）

The Dress and Head Ornament of the Statue of Man made of Nephrite in the Western Chou 西周 Period

by

M. Hayashi

We know there remain the statues of man made of nephrite in the Western Chou period as illustrated in the picture No. 1 to No. 5 on the first page of this number and in the figure No. 1 to No. 5. The costumes on these statues have some characteristics which we cannot find in the statues after the Spring and Autumn period 春秋時代; that is, for example, a square collar, a hem edged widely and straightly and cut into squarely.

In the first chapter, I would like to show these costumes were the original forms of the mourning dress 喪服 and *Shen-i* 深衣 described in *li chi* 礼記. Thereafter, in the early Han 漢 period, only incomplete comments could be made on the rule of these costumes.

In the second chapter, I would like to show an ax-formed thing hanging over the statue's knee was the old form of *fu* 市. Later, in the complementary article I will investigate minutely the words about the color and the material of *fu* which remain on the bronze tablets of the Western Chou period.

In the third chapter, I would like to show the thing like a horn on the statue's head as illustrated in the figure No. 1, No. 2 and No. 4 was *Mao* 髦 that, *li chi* says, a son wore when he discharged his duties to his parents, and further investigate the original meaning of the filial son's wearing such a thing.

The Making of the Society for China's Revival (*Hua-hsing-hui*) 華興会 and the Restoration Society (*Kuang-fu-hui*) 光復会

by

T. Nakamura

In the history of the Chinese revolutionary movements, 1900-1913, the

role played by the revolutionaries of the Society for China's Revival and the Restoration Society was as important as that of *Sun Yat-sen* 孫文 and *Hsing-chung-fui* 興中会.

In this article, we will analyze comprehensively the making of these societies from the viewpoint of the institutional history and try to explain the differences between the constitutions of these two societies.

In 1903, under the tense situation of the Far East accelerated by the military rivalry between Japan and Russia, the movement of the Student Volunteer Corps to fight Russia (*Chü-O I-yung-tui*) 拒俄義勇隊 arising from the critical problem how to confront the invasive Russia has brought about the change of its name to the Society for Education of a Militant People (*Chün-kuo-min Chiao-yü-hui*) 軍国民教育会, the reformation of its organization and the tendency toward the secret society and finally the system of revolutionary uprising under the leadership of the Society for China's Revival for the defeat of the Ching dynasty which was supposed to be westernized.

This process has also shown the acute declaration of intention of the Chinese revolutionaries against the Russo-Japanese War. On the one hand, they have confronted the invasive Russia, on the other hand, they have discovered the revolutionary Russia and have accepted the strategic thoughts of the Narodniki Movement. They have, consequently, composed the Assassination Corps (*An-sha-t'uan*) 暗殺団 as a subordinate organization of the Society for Education of a Militant People. But the Society for China's Revival has rejected the trend of the Narodniki Movement and at last the Restoration Society has started on the basis of the Assassination Corps.

The Policies of the Jacksonians

by

T. Shimizu

In the history of the United States, what we call "the Age of Jackson" stands in a unique position to link the two sharply contrasting periods: "the Era of Good Feeling" under the Monroe's presidency and the two decades preceding the Civil War.

During this age three big sections——the North, the South and the